

山西省產全蝎目*

高 島 春 雄

東京文理科大學動物學教室（當時）

Scorpions of Shansi, North China

予が受領のサソリ標品は15種（成幼共43頭在中）であつて其等は悉くキョクトウサソリと同定せらるべきものである。予は採集者山下博三學士の現地に於ける御苦辛に多大の敬意を捧げ併せてサソリ標品の調査に予を指定せられし關係各位の御厚志に謝意を表するものである。

綱 蛛形綱 Arachnida

目 全蝎目 Scorpiones

科 極東全蝎科 Buthidae

亞科 キョクトウサソリ亞科 Buthinae

屬 キョクトウサソリ屬 Buthus Leach (1815)

1 Buthus martensi Karsch キョクトウサソリ

Buthus martensi Karsch, Mitteil. Muenchener entomol. Vereins vol.

iii, p. 112 (1879); Kishida, Rep. 1st Sci. Exped. Manchoukuo, Sec. V, Div. I, Part IV, Art. 10, pp. 1-67 (1939); Takashima, Acta Arachnol. vol. viii, nos. 1/2, p. 8 (1943)

漢名：蝎子 Hsieh-tzü 全蝎 Ch'üan-hsieh 蟹子 Ch'ai-tzü 琵琶蟲 Pi-pa-ch'ung
 (以上村田懋麿氏に據る。但し蝎は本當は蝎であらねばならぬが支那でも混用されて居ると見える)

採集地：娘子關、6幼、2/V, 1942, 山下博三（以下總べて山下氏である）；太

* 東亞產全蠍類腳鬚類の調査（其の七）

谷, 1♂, 6/V, 1942; 臨汾, 1♀, 7/V, 1942; 橫水鎮, 1幼, 8/V, 1942; 橫水鎮～橫嶺關, 1幼, 9/V, 1942; 橫嶺關, 1♀, 9-13/V, 1942; 1♀, 13/V, 1942; 王茅鎮, 2♂, 1♀*, 14/V, 1942; 王茅鎮～垣曲, 2幼, 15/V, 1942; 西天和, 1♂, 1♀, 5幼の他に, 18幼を摺つた 1♀

分布：蒙古；滿洲；朝鮮；臺灣（？）；中華民國。

山西省に産することは舊く川友太郎氏(1906)が同省の標品をも調査したと書いて居られ、予(1943)は山西省靈石縣峨口鎮で1940年8月15日副島英三郎氏が採集の1♀に載き本種を記載した。右♀は生品で同時に1♂も貰ひ受けたので1箇月程予の手許で飼育してみた。高平岩馨邦博士が山西省交城(12/VII, 1940 ♀), 磁油村(13/VII, 1940 ♀), 晋城(10/VIII, 1940 ♀)等で採集された標品を調査したことがある。今回の山西天採集の標品から察するに山西省には各地に稀ならざることが了解される。

附記：

本種の和名として極東の文字を避けるならばツクシサソリ（岩川友太郎氏1906）を用ひれば宜い。本種に関するては滿洲熱河産に就き岸田久吉氏(1939)が精細なる記載を試みられ予自身(1943)も記載したがあるので今回は全く記載を省く。必要の士は末尾に掲げた文献から會得して頂き度い。學名には何等の異議が無い。種名は *martensi* よりも *martensii* の方が正しい。高天成・高塚太吉兩氏の「南京に於ける外科疾患、自昭和13年5月至昭和14年4月(第2報)」(實驗醫學雜誌 vol. xiv, no. 10, pp. 765-811, 1940) 中に“蝎蛇、蝎(Pandinus dictator)等による刺咬症は夫々1例あつた”とあるが此の學名を帶びるサソリはアフリカのカメルンやキンゴ地方に棲息する世界第二の大サソリであつて、華中邊に現れる譯が無い。どうして此の學名が採用されたのか判らぬが刺咬した實體は恐らくキョクトウサソリであつたであらう。

* この個體は腐臭を發し壞れて來たので計測の後廢棄した。他の全標品は現在予の手許に預つてある。

櫛状器の歯數は種別の一つの手懸りとなり又属々に次性徵の一つとなる。左右同數の場合も多いが右か左かが1本少い場合もある。今回の43頭全部の歯數を計測したが(幼者は低倍率の顯微鏡下に計へるのが確實である)成體の標品では“本種に於て19~25本が♂、16~20本が♀”といふ原則に該當した(但し1例♀に於て左右共24本のがあつた)。♀に於て大體20本どまり、♂に於て22本以上と云へるのである。幼生だから歯數が少いとは申されぬ。頭胸長19mm位になれば他の二次性徵で♂か♀か區別は容易である。今回の片側の歯數最多26本、最少18本であつた。

西天和で採集された1♀は山下氏の談に據るに背上に18頭の幼生を擔び所謂哺育をして居たものである。其等は何れも淡黃色を呈するが熟視すれば背甲は大部分黒褐色、前腹背面は淡墨色、後腹部第5節は大部分極めて淡き黑色、腹面も同様、毒針は濃褐色である(但し以上は液浸のものでの色彩)。親子の計測値を示せば次の通り(単位mm)。

		頭胸長	尾長	櫛状器歯數	
1	♀	23	29.5	18(右)	19(左)
2	幼	7	7.5	23	24
3	々	6.5	8	18	18
4	々	7	8	20	19
5	々	7	8.5	22	22
6	々	6	8.5	24	24
7	々	6	7.5	24	24
8	々	5.5	7	23	23
9	々	7	8	19	18
10	々	5	7.5	23	24
11	々	7.5	9	22	23
12	々	7	8	22	23
13	々	6	8	20	20
14	々	6	8	19	19
15	々	7	8	20	20

16	夕	7	9	22	23
17	夕	6	8	19	20
18	夕	5	8	23	22
19	夕	6	8.5	20	19

本種は山西省に於ける人畜有害動物の一つとして看過してならないものである。之に刺螫されても古來傳へられる如く猛毒でなく、落命した實例もあるがそれはよくよく不運な人と云ひ得る程度である。滿洲事變以來此の蝎は前線將士の大いに注意する所となり又刺螫されたつはものも時々出たやうであるが、其の爲死の轉機をとつたとこふ話を聞かぬのは幸である。怖るべきものではないが又決して油斷してはならぬ。本種の毒性に關しては既に沖波實氏 (1939) の便利な綜説があること故それに譲る。

文獻

1. 岩川友太郎 1906: 本邦產の蝎類. 動物學雜誌 xviii, no. 207, pp. 5-12, pl. II
2. 村田懋磨 1936: 鮮滿動物通鑑. pp. 605-607
3. 沖波 實 1939: 極東蠍(きよくとうさそり)ノ第二次性徵. 朝鮮博物學會雜誌 no. 25, pp. 17-19, 4 figs.
4. 沖波 實 1939: 蠍(サソリ)ノ害. 朝鮮醫學會雜誌 vol. xxix, no. 2, pp. 354-365; no. 3, pp. 481-488, 1 pl.
5. 潘 承彬 1939: Morphology and Anatomy of the Chinese Scorpion *Buthus matrensi* Karsch. Peking Nat. Hist. Bulletin vol. xiv, pt. 2, pp. 103-118, 2 pls.
6. 岸田久吉 1939: 热河省產蜘蛛類全蝎目. 第一次滿蒙學術調查研究團報告第五部第一區第四編第十輯 pp. 1-67, Pls. I-IV
7. 高島春雄 1941: 日本の蝎. 寶塚昆蟲館報 no. 10, pp. 1-7, 6 figs.
8. 高島春雄 1943: 日本產全蝎目及脚鬚目. Acta Arachnologica vol. viii, nos. 1/2, pp. 5-30, 6 figs.

〔あとがき〕

昭和17年4月から6月にかけ山西省學術調查研究團が華北山西の各地を踏査

した。動物學者として清棲幸保、安松京三、山下博三3氏が参加されたが鳥と昆蟲以外は何でも山下氏が努力採集したらしい。私が調査を委嘱されたサソリ標品も主として山下氏の蒐めたものである。熱河の報告の時苦杯を飲まされて懲りて私は、標品を受取つて後急速に調査を終了し上記の報告を作成して岡田彌一郎博士のお手許に提出した。然るに空襲—終戦により研究團報告を丸善から出版する計畫も中止になり、原稿は掲出してから數年を経た昭和22年秋に私の所に戻つて來た。永久におくちにするのも残念であるから本誌上に掲げる。其の後私は山西省ではないが華北の河北省で今村泰二氏が採集した多數のキクトウサソリを検する機會に恵まれ比較によい資料となつた。それを「極東蝎」といふ題で *Acta Arachnol.* vol. ix, nos. 1/2, pp. 51-53 (1944) に書いたから志ある御方は参照ありたい。さるにても快男兒山下博三氏は其の後應召して比島戰線に馳せ参じたと仄聞するのみで終戦後も消息は皆目不明である。同氏が忽然としてどこからか歸還してくれるやうに衷心から祈る。(昭和23年1月附記)

溝淵謙介君の評

本會通常會員溝淵謙介氏は今春來肺浸潤にて療養中のところ遂に快癒に到らず7月21日長逝された。享年僅かに22歳で惜しみても餘りあることである。氏は日本發送電資材部調整課長溝淵義教氏の令息で他に兄弟姉妹なく御両親鍾愛のお子さんであつたから御両親のお嘆きもさこそと想はれる。世田谷の國士館中學校から東京高師を志望して成らず、日本獸醫畜產専門學校に入學し在學中であつた。早くから動物好きで日本動物學會を始め多くの學會や同好會に入會し會誌を讀むのを娛みにしてゐた。本當にこれからといふ所で夭折したので論文などまだ一つも出來てゐなかつたのは殘念である。溫和な性質で知友先輩の爲によく盡し明るい樂天的な半面と共に誰からも愛され信頼されてゐたやうである。ターザン映畫のファンであつたことも面白い。(高島)